

小学生の時、僕はイジメられていた。無視されたり、叩かれたり……。死にたいとは思わなかったけど、学校に行くのはとても辛かった。イジメをするのは一部のクラスメートだけだったけど、他の子たちは自分もイジメられるのが怖くて、誰も助けてくれなかった。



ある日の授業で、「自分のお父さん」のことを作文に書く授業があった。先生は何でもいいんだよ……。遊びに行ったこととか、お父さんの仕事のこととかでいいと言っていた。けど、僕はなかなか書くことができなかった。クラスの子たちは、みんな楽しそうに書いている中、僕一人教室の中でひとりぼっちだった。結果から言うと作文は書いた。書いたのが「自分のお父さん」と言うテーマと違うことを書いた。あとで先生に怒られるかも……と思っていた。また、こればかりで、またイジメられるのかなと、子ども心にとっても不安だった。でも、それしか書けなかった。

作文は授業の終わりと同時に集められ、先生は、「来週、発表会をします」と言った。先生はそのまま教室を後にした。その後、頭を叩かれてイジメられている普通の僕がいた。

先生は「じゃあ、今日は発表会をしてもらいます」と言った。今日は作文の発表会の日。ただひたすら「僕の作文は選ばれませんように」とただ祈って下を向いているだけだった。発表会は順調に進み、あと10分で授業が終わるところまでできていた。

僕は少し安心していただけだったが、その期待は無駄だった。「では、最後に〇〇君に読んでもらいます」僕は頭の中が真っ白だった。「あの、先生……。僕はお父さんのことを書いてないです。」と言ったら、クラス中から非難の声が上がった。「バカじゃねえの？廊下に立っているよ、オマエ！」いろいろな声が飛び交ったが、非難の意見はみんな一緒だった。もうどこにも逃げられなかった。

「静かにしなさいっ！」先生の突然の大声に教室は静まり返った。「先生は〇〇君に作文を読んでほしいの、だからみんな聞いてください！」「〇〇君、さあ読んでください。」言われるままに僕は作文を読んだ。

「僕のお父さん。僕のお父さんはいません。幼稚園の時に車にはねられて死んだからです。だから、お父さんと遊んだのも、どこかへ行ったことも、あまりありません。それにお父さんのこともあまり覚えていないです。写真があるので見ましたが覚えていません。だから、お婆ちゃんとお母さんの事を書きます。お母さんは昼間仕事に行ってお父さんの代わりに働いています。朝早くから夜遅くまでいつも働いています。いつも疲れたと言ってますが、甘いお菓子やたい焼きを買って来てくれるのでとても大好きです。お婆ちゃんは元気で通学路の途中までいつも一緒に歩いて来てくれます。ご飯はみんなお婆ちゃんが作ってくれて、とてもおいしいです。

お母さんが働いているので父兄参観の時はお婆ちゃんが来てくれます。みんなは「おまえの母ちゃんババアなんだ？」とかからかってくるので恥ずかしかったけど、でも、とても優しいお婆ちゃんです。だから、お父さんがいなくても僕はあまりさびしくありません。お母さんとお婆ちゃんがいてくれるからです。お母さんは、「お父さんがいなくてゴメンね！」と言ったりするので、早く僕が大人になって仕事をして、うちの家族のお父さん代わりになって、お母さんとお婆ちゃんの生活を楽しませてあげたいと思います。だからお婆ちゃんには長生きしてほしい、いつも言っていて、お母さんにはいつも肩をもんであげています。二人とも泣いたりするので少し困るけど、そんなお母さんとお婆ちゃんが僕は大好きです。」

一気に僕はしゃべった。先生には死んだお父さんのことを書けばいいのと言われたらと思ったし、クラスの友だちからは、「おまえお父さんがいないのか？」「もしかして捨て子だったんじゃないか？」と、またイジメられるのかなと思ったりしていた。

顔を上げる事もできなかった僕は救いを求めるように先生の顔を見てみた。すると、先生は立ったまま泣いていた……。そしたら、ほかの子たちもみんな泣いていた。僕が初めて好きになった初恋の子は、机にうつぶして泣いていた。僕をいじめていた子たちも泣いていた。でも、僕には、なぜみんなが泣いているのか分からずにいた。「どうして……？お父さんがいないから……？お母さんとお婆ちゃんの事を仕方なく書いたのに……？どうしてみんなが泣いているのだろう……？」

「〇〇君……」「はい……」「先生は人の心を分らないダメな先生でした、ゴメンなさい。世の中には親御さんのいない子もいるのにね！そういう子たちのことも頭になくて、お父さんのことを書いてだなんて、あなたのことも知らなかったとはいえ、〇〇君！本当にゴメンなさいっ！」先生は顔を覆ったまま泣き崩れていた。

それがその日に起こったできごとだった。次の日から、なぜかイジメられなくなった。相変わらず口悪くからかったりはされたけど、殴られることはなくなった。イジメのリーダー格の子に、遊びに連れていってもらえるようになった。



先生はその後の家庭訪問で、その日のできごとをお婆ちゃんに話して謝っていた。作文の事を僕は誰にも話していなかったので少し怒られたけど、話を聞いた母も、今は亡くなった婆ちゃんも、うれし泣きみたいな、くちやくちや顔で叱ってくれた。

僕も立派な、人に誇れるような仕事はしていないけど、家族のおかげで一人前の大人の男になれたと思う。大人になった今でも、その時のことはなぜか覚えているし、ふと、思い出したりもする。

掲載した文章は、小学校の時にいじめを受けていた、ある男の子の実話です。家庭の状況を知らなかった先生、そして、真実を知ったクラスの友だちの心の変化を感じとってみてください。